# 巻頭言

## 「学ぶことと教えること」

理事長　新谷　友良

村上春樹の「小澤征爾さんと、音楽について話をする」が新潮文庫になっていて、その後半に「スイスの小さな町で」という小文があります。小澤征爾が主宰する若い音楽家に対する10日間の集中セミナーについての見聞録です。学ぶことと教えることの化学反応、学ぶ側と教える側が相互に刺激しあい高まっていく様子が非常に魅力的に書かれています。

学生時代、他の学部の講義を１年間聴講したことがあります。最初から不人気な講義で、学生は多いときで５、６人、少ないときは２人（私もさぼったことがありますので、学生がゼロという日もあったのかもしれません）というありさまでした。教授は定刻に入ってきて、出欠など度外視で淡々と講義を始めて、90分の講義が終わると、質問も受け付けず退出します。このような講義でしたので、当然最後の試験は無し、「西域アジアの文化について思うところを記述せよ」という取り付く島もないテーマのレポート提出で終わりでした。

この両極端とも思える「学びと教え」のスタイルのどちらが良い、悪いというのは簡単ではなく、事実この教授の研究成果は赫赫たるもので、教え子からも研究者を輩出しているようです。束縛のなさは、その自由さを活用できる人にとっては、非常に豊かな学びの場なのかもしれません。ただ、この教授スタイルの「学びと教え」はあまり一般的ではなく、真似ることは大変な気がします。

この９月で、東京都中途失聴・難聴者手話講習会の講師を担当して３年になりました。入門クラスを担当して、いろいろな方にお会いしました。手話講習会ですので、もちろん手話の勉強が中心ですが、講義を通じて教えることよりも学ぶことが多いというのが実感です。６か月の講義を通じて、前に前に進んで行くのはもちろん受講生の方なのですが、同時に講師・助手も一緒に前に進むクラス全体の「化学反応」があります。

入門クラスの修了式発表は、手話での「自己紹介」です。６か月間勉強した手話学習の成果が表れることも大切ですが、それと別に受講生の方に人に話しかける表情が出てくるのをいつも期待します。そして、その期待は裏切られません。冒頭の「スイスの小さな町で」とは比べようもありませんが、大変貴重な私たちの「学び、教える」場と思っています。